

中学校バスケットボール授業における運動有能感を高めるための指導の在り方の検討

—運動が苦手な生徒の主観的評価及びゲームパフォーマンスの変容に着目して—

宮崎頼子 (群馬大学大学院)

1. 目的

子どもが生涯にわたって継続的に運動を行うためには、内発的動機づけが必要であり、さらに、運動に対して内発的動機づけられるためには、運動有能感が大切である(岡澤・三上,1998)。生涯にわたって運動に親しむ態度を育成するためには、中学生の時期に、運動有能感を低下させない、もしくは維持・向上させることが重要である。そこで本研究では、中学校2年生のバスケットボール単元を取り上げ、運動有能感を高めるための手立てを適用した介入実践授業を行い、特に運動が苦手な生徒に着目し、中学校における運動有能感を高めるための指導の在り方について検討することを目的とした。

2. 研究方法

- 1)期日と対象:2018年11月4日～12月20日にかけて、群馬県I市立B中学校2年生(男子)を対象に、全8時間(pre+7時間)のバスケットボール単元を実施した。
- 2)分析方法:(1)子どもの主観的評価:①診断的総括的評価(高田ら,2000)及び②運動有能感測定尺度(岡沢ら,1996)を単元前後に実施した。③形成的授業評価法(高橋ら,1994)を、毎時間後(1時間目を除く)に実施した。(2)ゲームパフォーマンス評価法:ボール保持者の技能発揮の適切さを分析した。ボールを持たないときの動きについては、ボール保持者がパスを出すごとに、ボールの受け手となる2人の動きの適切さを評価した(ショット①:ボール保持者とショットの間にマークなし、ショット②:ボール保持者とショットの間にマークあり)。
- 3)抽出生徒の選出方法:「運動有能感調査」合計得点が最も低く、かつ技能下位の生徒1名とした。
- 4)運動有能感を高めるための手立て:3つ(教材の工夫・仲間との関わり・教師による関わり)を適用した。

3. 結果・考察

1)クラス全体:(1)子どもの主観的評価:①診断的総括的評価:「学び方」(単元前11.7点、単元後12.5点)及び「できる」(11.2点→12.1点)がそれぞれ有意に向上した。

②運動有能感調査:「身体的有能さ」の「Q10:運動についての自信」が有意に向上した(単元前3.2点、単元後3.5点)。

③形成的授業評価:「総合評価」の単元7時間目は3点満点中2.4点であった。(2)ゲームパフォーマンスの変容:①技能発揮:パス(pre60.0%→単元6・7時間目:67.6%)・キャッチ(82.1%→87.5%)・シュート(17.9%→19.4%)の有意差は認められなかった。②ショット:ショット①②の合計(75.9%→74.3%)・ショット①(95.7%→96.8%)、ショット②(70.6%→71.1%)の有意差は認められなかった。

2)抽出生徒:(1)子どもの主観的評価:①診断的総括的評価:「合計得点」は、単元前が36点、単元後が35点であった。②運動有能感調査:「合計得点」は、単元前が17点、単元後が26点であった。③形成的授業評価:「総合評価」は、単元4時間目以降に最高得点の3.0点となった。(2)ゲームパフォーマンスの変容:①技能発揮においてパスの適切率は単元終盤には70%以上、キャッチは3時間目以外が100%、シュートはばらつきがみられた。②ショット①の適切率は3時間目以外が100%、ショット②は単元後半には適切率が80%以上になった。(3)仲間との関わり:仲間の良いプレーに対して賞賛するなど単元を通して仲間と肯定的な関わりがみられた。(4)教師による関わり:抽出生徒に対する教師の相互作用は単元を通して計37回行われた。

4. 総括

運動有能感を高めるための手立てを適用すると、クラス全体は、学習を重ねることによってゲームパフォーマンスは維持され、「運動に対する自信」が高まった。また、抽出生徒は毎時間実践された体育授業に対して高い評価を示し、ゲームパフォーマンスが維持され、運動有能感が向上したといえる。

5. 文献

岡沢祥訓・北真佐美・諏訪祐一郎(1996) 運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究. スポーツ教育学研究, 16(2): 145-155.